

「食と農」の博物館 展示案内

No.11

東京農業大学「食と農」の博物館
〒158-0098 東京都世田谷区上用賀2-4-28
TEL. 03-5477-4033
FAX 03-3439-6528

展示期間

2005.10.4～2006.4.16

人類の原器 ヒヨウタン1万年の世界 湯浅浩史コレクション



様々なヒヨウタン

はじめに

ヒヨウタンを知らない人はいないでしょう。でも、ひょくんな、ユーモラスな形のヒヨウタンが、すべてではありません。実に奥が深いのです。

ヒヨウタンは、最古の栽培植物のひとつであり、1万余年もの歴史があるのです。人間が生きていくための生活用具として、多様な形と大きさ、軽さ、加工の容易さなどから様々な用途に使われてきました。多種の楽器のルーツでもあり、世界各国での広がりに驚くばかり、文化に値するでしょう。

今回、財団法人進化生物学研究所の主任研究員で、東京農業大学環境緑地学科教授である湯浅浩史博士のコレクションを展示いたします。

ヒヨウタンとは

ヒヨウタンは、ウリ科の1年草で、学名は*Lagenaria siceraria* 英名は Gourd です。ふつうヒヨウタンはくびれのある形と思われていますが、くびれのない壺形や首の長いヒャク形もあります。また、丸い形やヘチマ形はユウガオと呼ばれます。ユウガオを乾かしたのが、カンピョウで、植物学的にはいずれも同じ種なのです。日本のヒヨウタンとユウガオの大きな違いは、ヒヨウタンは苦く、ユウガオには苦味がないことです。ヒヨウタンの日本での古名はヒサゴ、ユウガオはフクベです。一方、「瓢箪」の瓢の字は中国では本来ヒサゴそのもので、箪は竹製の飯櫃(こめびつ)を表わしています。中国の箪瓢とは一椀一汁の粗末な食事を意味します。

ヒョウタン栽培の歴史

ヒョウタンは、日本以外、世界各地で土器に先行し、有史以前の遺跡から出土しています。最も古いヒョウタンは、紀元前1万年以上前とみられるペルーのアヤクチヨ遺跡、紀元前7千年頃のメキシコのタマウリパス洞窟などからヒョウタンの種子や破片がみつかっています。アジアではタイのスピリットケープから紀元前7千年前の種子。中国の河姆痕遺跡から紀元前4700年の果皮と種子が出土しています。

日本では、縄文時代早期9600年前の滋賀県の栗津湖底遺跡や8500年前の福井県鳥浜貝塚から出土したヒョウタンの果皮と種子が最も古いとされています。



ヒョウタン(カメルーン中部)



ヒョウタンの畑(セネガル)

ヒョウタンの原産

現在ヒョウタンは、4種知られていますが、そのうちヒョウタンの栽培種 *Lagenaria siceraria* は1年草で花は夜咲き、他の野生種 *L.abyssinica*、*L.sphaerica*、*L.brevifolia* は、いずれもアフリカ産の多年草で、花は



農家のヒョウタン・生活用具一式(カメルーン)

昼夜咲き、果実は球形です。

このように同属の野生種がすべてアフリカに限られること、アフリカにおける種子の多様性から、栽培種の起源もアフリカと考えられます。

ヒョウタンの品種

ヒョウタンの品種は、普通果実の大きさで分けられます。長ヒョウタン(果実の大きさ1~2.7m)、大ヒョウタン(30~50cm以上)、中ヒョウタン(20~30cm)、百成ヒョウタン(13~20cm)、千成ヒョウタン(10cm前後)、マメヒョウタン(5cm以下)などがあります。



野生のヒョウタン
(マダガスカル)

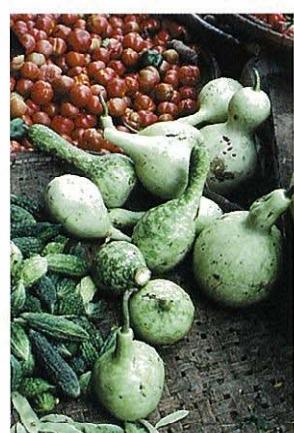


イボヒョウタン



こどもとヒョウタン
(アイルランド)

さらに首の長い鶴首やそれが1mをこえるロングハンドルディッパー、丸ユウガオや長ユウガオ、いぼのあるイボヒョウタンなど多彩です。



食用ヒョウタンとニガウリ
(フィリピン)



長ユウガオにカーブをつける栽培法
(フィリピン・バターン諸島)

容器としてのヒョウタン

ヒョウタンは、夏の夕方に白い花を咲かせます。雌雄異花で、果実は初め毛があります。成熟すると毛が取れ果皮が硬くなります。開花してから50~60日がたち、果肉がかたくなったものを採取し、果柄の付け根を切り落し、1~2週間水につけ、内部を腐らせます。その後、種子や果肉を取り出してよく乾燥すると、容器のヒョウタンになります（容器としてのヒョウタンには、ユウガオやフクベの果実で作ったものも含まれます）。



水入れ(沖縄)



ヒョウタン彫刻(ペルー)



飾りヒョウタン(ペルー)



ヒョウタン売り(カメルーン)

ヒョウタンの容器性は非常に優れていて、様々な用途で利用されています。軽量であり、持ち運びが楽なことから、人類の水の確保の面で遠くへの移動が可能になりました。その結果、遠洋への進出が可能となり、人類の行動範囲を広げ、他大陸への移住などが起こったと考えられています。



飾りヒョウタン(韓国)



水パイプ(ザイール)



衣装入れ(カメルーン)

ヒョウタンの用途

ヒョウタンの果実は、様々な形態をしています。人類は、その形態の多様性と縦にも横にも切って使え、さらに、彫る、透かす、焼く、塗る、描く、染める、変形させるなど加工が自由なことから色々な用途を考え出しました。



マテ茶容器(南米)



帽子(フィリピン)



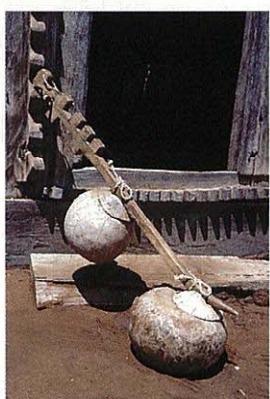
コオロギ入れ(中国)



石灰入れ(ニューギニア)

容器、食器、花器、喫煙具、帽子、仮面、装身具、農具、漁具など240もの多岐にわたっています。马拉カス、マリンバ、シタール、コラ、笙、コブラ、笛など世界の多くの民俗楽器に使われ、ニューギニア高地族では、男性衣装のペニスケースとして使用されています。

また、実用品以外にもヒョウタンの空洞性に異次元性を見つけ、神話、伝説、信仰、呪術など精神分野との結びつきも世界各地で知られています。



楽器(マダガスカル)



コラ(セネガル)



笙(タイ)



弓琴ンベット(ガボン)

「人類の原器 ヒヨウタン1万年の世界」関連イベントのご案内

■講演会

「ヒヨウタンの文化」

2005年10月29日(土) 13:00~14:30

講演者 湯浅浩史氏 (本学環境緑地学科教授・(財)進化生物学研究所主任研究員)

「人類の原器 ヒヨウタン1万年の世界」展示委員会

委員長 湯浅浩史

委員 今木 明 橋詰二三夫 山口就平 吉田 彰

(「食と農」の博物館 宮林茂幸 梅室英夫 島野孝一 原口光雄)

「沙漠よ緑に蘇れ ジブチ共和国15年の熱き闘い」関連イベントのご案内

■講演会 会場:1階映像展示コーナー 13:00~14:30

2005年

- | | |
|---------------------------|------------------------------------|
| ①10月 8日(土) 「砂漠か?沙漠か?と沙漠化」 | 塩倉 高義氏(本学名誉教授) |
| ②10月22日(土) 「沙漠化と耕うん」 | 田島 淳氏(本学生産環境工学科助教授) |
| ③11月 3日(木) 「アフリカの現状」 | ISMAËL GOULAL BOUDINE(在日本ジブチ共和国大使) |
| ④12月 3日(土) 「乾燥地の農業と緑化」 | 高橋 久光氏(本学国際農業開発学科教授) |

2006年

- | | |
|------------------------|-----------------------|
| ⑤1月28日(土) 「ジブチの気象」 | 渡邊 文雄氏(本学生産環境工学科助教授) |
| ⑥2月18日(土) 「アフリカの稻・ネリカ」 | 志和地弘信氏(本学国際農業開発学科助教授) |
| 「ジブチの直物」 | 高橋 新平氏(本学造園科学科助教授) |
| ⑦3月11日(土) 「沙漠に木を生やす」 | 福永 健司氏(本学森林総合科学科講師) |
| 「衛星から見たジブチ」 | 豊田 裕道氏(本学生産環境工学科教授) |
| ⑧4月 7日(金) 「さらなる沙漠緑化」 | 高橋 悟氏(本学生産環境工学科教授) |

◎その他、ジブチ料理を食べる会なども計画しております。

詳細は博物館までお問い合わせください。

■その他のイベント

「富士宮フードバレー展 人と心の交流 富士宮食の駅」

2005年11月12日(土)~13日(日)

◎「富士宮市と東京農業大学との連携協力に関する協定」事業 第1弾

★その他色々なイベントを計画しております。

次回企画展のご案内

「マダガスカルの博物誌」

.....2006年4月25日(火)~11月12日(日)

三笠山を 焼く会

2005年

10月29日(土)
30日(日)

●体験時間

10:30~12:30

14:00~16:00

三笠山を焼いてみよう
当日整理券を配布します



この印刷物は再生紙を使用しております。

2005.9.30.10000